

シンポジウム「東南アジアにおける日本の将来」

猪 木 正 道

1 生 い 立 ち

1964年12月はじめに、バジリー教授（Prof. John Badgley）と昼食をともにしていた際、10年後の東南アジアはどうなるだろうか、という話題が出た。バジリー教授は、ビルマの農村で長い間現地研究を行なった34歳の政治学者だ。京都大学の東南アジア研究センターに招かれて、一年間講義とセミナーをやっているのだが、何しろエネルギーにみちあふれているから、行動意欲も強い。「東南アジアにおける日本の将来」という国際シンポジウムをやってはどうかと、彼は私に提案した。そこで私たちは東南アジア研究センターの岩村所長に相談したところ、計画が具体化すればセンターの国際交流計画にとり入れようという快諾をえた。

それから約一か月間、バジリー教授と私とは法学部の福島、勝田、香西、高坂の四氏、農学部の本岡氏および経済学部の鎌倉氏に加わっていただき、誰をいつ招くかという問題について相談した。その結果、インドネシアからスマルジャン教授、フィリピンからサニエル教授、タイからチョムチャイ教授を招くことになった。今までの経験からビルマの学者が参加してくれるのは困難かと思われたが、そのかわり、もとラングーン大学の総長をやっておられた世界屈指の経済学者フラ・ミント教授（オックスフォード大学）を迎えることができた。

東南アジア以外からの外国人としては、ニューデリーの国際問題研究所のV・P・ダット教授をぜひ呼ぼうということになった。数多いアメリカの東南アジア研究者の中で、私たちは、インドネシア問題の最高権威三人のうち二人、すなわちカリフォルニア大学からランド研究所に転じたばかりのパウカー教授とエール大学のベンダ教授を招くことにした。そしてオーストラリアからは、やはりインドネシア問題で名高いフィース教授を選んだ。

私たちがインドネシアの専門家に特別の注意を払っ

たのには十分な理由があった。日本ばかりでなく、世界中の新聞やテレビ・ラジオでは、ヴェトナム問題がしきりと報道され、論評されている。私は正直に言って、ヴェトナムはもうたくさんだという気持ちを持っており、バジリー教授も、私と同感だった。皆がヴェトナムに過大な注意を払っているうちに、実はヴェトナムなどとは比較にならないほど巨大な変化が、目立たない形で、東南アジアに進行しているのだ。

内外の報道関係の方や政治家、軍人、外交官などが、現に火をふいているヴェトナムを重視することは、当然である。しかし東南アジアを長い目で研究しようとする立場からは、ヴェトナムはもはや適当な対象ではない。それよりは「静かな革命」が無気味な形で進行しているインドネシアにもっと注目すべきだ、というのが私たちの一致した気持ちであった。アメリカでは南ヴェトナムが共産化すれば、何もかも将棋倒しになるという意見——いわゆるドミノ理論——が行なわれているけれども、もしインドネシアが共産化したら一体どんなことになるか？

大変さいわいなことに、二月のはじめにはパウカー、ベンダおよびフィース氏の3人とも「喜んで参加する」という返事をくれた。ただ大いに残念だったのは、共産圏の学者中で、インドネシア問題の第一人者と評価されているソ連のグーベル教授が参加できなかったことと、インドネシアのスマルジャン教授が開会の直前に、「出国許可がえられないので、残念ながら参加できない」という電報を打ってきたこととである。

京大以外の日本側参加者としては、東大の衛藤、一橋大の石川(滋)、国際キリスト教大の福地三教授にきまった。なおシンガポール大学から国際キリスト教大学に転じたワーフェル教授と大阪市立大学の神谷教授および南カリフォルニア大学からランド研究所に移ったランガー教授にも加わっていただいた。

2 活発な討議、若さの強み

今からふりかえると、20人の参加者が確定した時、

実はこのシンポジウムの成功は既定の事実だったのである。なぜならば、20人のうちで、所長の岩村教授を別格として、全部が50歳以下だったという点こそ、今度のシンポジウムを驚くほど活発なものにした決定的な要因となったからだ。私は何度か国際会議に出席したが、一番困るのは、日本人と外国人との間で、自由に討議することがきわめて困難な点である。これは必ずしも言葉の問題だけにもとづくのではない。同時通訳という便利な方法もあるのだが、一般に日本の学者は書くことには強くても、討議には向いていない。火の出るような討論できたえあげられた外国の論客に対すると、日本人は逃げ腰になりがちであり、ひどく見劣りしてしまう。

ところが5月31日の朝、岩村所長の開会の辞が終って、討論が始まった時、私たちがひそかに抱いていた心配は、一挙にふっとんでしまった。東京から参加された石川、衛藤、福地の三教授も京都側の七人も、私を除いては、びっくりするほど英語がうまい。打てばひびくような反応の速さに外国からの参加者たちは舌をまいたらしい。単に英語がうまくなったというだけではなく、頭の回転速度が2ケタも、3ケタも高まった感じた。

私は開会后20分くらいで、このシンポジウムが誰も予期しなかったほどの成功を収めるという確信を持った。日ごろどちらかというと気むずかしいといわれるパウカー教授が何ともいわれないほどうれしそうな表情を示しているのを見て、すっかり安心した。しかしなぜこんなに活発な意見の交換が行なわれているのか、と私は考え直して見て、ハタと思い当たり、そして同時にガックリした。いろいろな会合で、一番若い参加者の中に数えられていた私は、今度のシンポジウムでは最年長の一人になっている。東南アジアの学者も、アメリカ人も、オーストラリア人も、そしてほとんどすべての日本人も、30代でなければ40代の前半だ。つまり第一線の学者を招いたというところに、私たちのシンポジウムの一番の強みがあったのである。

年功序列を重んずる日本では、いきのいい新進気鋭ばかりで重要な問題を討議するということは従来ほとんど行なわれなかった。そういう老人支配制の欠陥を打破したという点でも、東南アジア・シンポジウムには大きな意義があった。若さの強みはシンポジウムの組織・運営の面にも十分発揮された。国際会議の成否

は、七、八割まで、舞台裏の事務局に依存している。若い人々の献身的な働きぶりを見て「日本の将来」を論ずる会議にふさわしいものだと、外国からの参加者たちは感心していた。

3 インドネシアはどうなるか？

インドネシアが10年後にどうなるか、インドネシアと日本との関係はどのような方向に展開するか、というのは、今度のシンポジウムの主題の一つである。インドネシアは島国である点、人口が1億前後という点で、日本に似ているが、インド、イスラム、オランダ文化の深い影響を受け、第二次大戦中に日本軍によって占領されるまで、オランダの植民地であったこと、日本の降伏後、オランダとの間に長い独立戦争を戦い抜いたという点で、わが国とはまるで違っている。

独立運動以来今日まで、スカルノ大統領の指導力は絶大である。しかし10年後のインドネシアを考える場合、誰がスカルノ大統領の地位をつぐのかが当然問題になる。それに大統領の言動は、陽性で変化に富んでいるから、インドネシアの将来を予測することはきわめてむずかしい。ジャワ島を中心に3百万の黨員を持つ共産党が断然第一党であること、党議長アイディットが若くて恐ろしく有能なことはよく知られている。したがって「指導された民主主義」と呼ばれるスカルノ独裁体制が、共産党の一党独裁に転化するかどうか、もし転化するとすれば、どんな形で転化するかがポイントである。

従来スカルノ大統領は、共産党と軍という二頭立ての馬車を乗りこなしているというのが通説であった。しかし党という馬はどんどん成長してゆくのに対して、軍というもう一頭の馬の方は、ナスチオン將軍の影が薄くなるにともなって、共産党に対する解毒力をだんだん失っている。国連からの脱退が象徴するように、外交政策に関するかぎり、インドネシアは最近いちじるしく北京に接近している。北京・ジャカルタ枢軸という言葉まで行なわれているほどだ。6月末からアルジェリアで開かれることになっていたアジア・アフリカ会議を反米会議にもってゆこうとしていたのが、周恩来とスカルノであったことはよく知られている。

他方スカルノ大統領が親日的であることも間違いない。わが国と中国との間を何とかしてあっせんしよう

とするスカルノ大統領の努力は、川島自民党副総裁と周恩来総理との間に腕を組んで立った彼の写真が象徴している。日本側にも、スカルノ大統領との個人的な接触を通じて、インドネシアが共産化することを防止できると考えている人々は少なくない。

フィース教授は、インドネシアのなぞを解くカギとして、連続説と破局説という二つの解釈を比較論評した。破局説は、数年前から進行中の一見破局的なインフレーションに注目し、インドネシアは今までのようにあいまいな状態をいつまでも続けるわけにゆかず、必ず近い将来に破局に突入すると考える。他方連続説は、インドネシアの特殊性から、破局を経ないで、連続的に変化してゆくと説く。会議の直前にインドネシアを訪問して、フィース教授は、破局説よりも連続説の方が当たっているという印象を強めたいらしい。

少年時代をインドネシアに送ったベンダ教授は、歴史的な立場から、インドネシアのオランダ化ないし西欧化を過大評価してはいけないといひしめ、やはり連続説を支持した。パウカー教授も、インドネシア共産党の強さと柔軟な戦術とを強調した。こうして、インドネシアに関する討議から私のえた印象は、この国が破局をとまなわないうで共産化してゆく、あるいはすでに事実上共産化しているということである。

3 日本の東南アジア政策

では共産化したインドネシアと日本との関係はどうか。アイディットのインドネシアは、対外政策に関しても、内政面においても、スカルノのインドネシアよりはむしろ自制的となり、合理的態度を打ち出すのではないかという見解が強かったのは、一見意外のようだが、実は十分な根拠を持っている。たしかにインドネシアの地理的な位置から見ても、共産中国のような抗米一辺倒の政策はむずかしい。むしろモスクワ寄りの外交を展開し、西側との友好を求めないまでも、通商関係の強化には熱意を示そうだ。インドネシア全土が完全な共産党独裁に転化するまでには、ジャワといわゆる外領との関係などいろいろまきれも起こるに相違ないが、ロシア型でも、中国型でもない、インドネシア型のユニークな共産国が出現する公算はきわめて大きい。わが国としても、そういう新事態に備えなければなるまい。

私はアメリカが南ヴェトナムの共産化にばかり過大

な注意を払ってインドネシアの連続的な共産化に全く打つ手がない矛盾を不思議に思っていたので「どんな強大な国家でも、他の国が内部から共産化することを防止できるものではない」と強調した。そして日本としては相手が西側との友好・同盟国であろうと、共産国であろうと、それぞれの国の個性を尊重して、その個性にふさわしい方法で共存し、友好するのがよいと主張した。

私の考えでは、第二次世界大戦で、日本が中国から東南アジアまでを侵略し、軍事占領した結果、民族・社会革命の巨大なエネルギーが連鎖反応を始めたのであり、タイ、フィリッピン、マレーシアのように西側と同盟したもの、北ヴェトナムのように共産化したもの、ビルマや最近までのインドネシアとカンボディアのように非同盟政策をとったもの、いずれも、民族・社会革命のエネルギーに対処する方策なのだ。アメリカはこの点に関する理解を欠いたために、西側と結んだ三国以外では、アメリカの政策は大体において失敗した。東南ア諸国の主人公はそれぞれの国民だという正しい認識に立って、日本は多様で柔軟な政策を展開すべきだと私は強調したわけだ。

これに対して、ランガー教授から、私の見解は宿命論的・決定論的に過ぎる、ラオスで最近考察したところから見ても、アメリカや日本が経済援助などを与えることによって、情勢を変化させる可能性は大きいという批判が行われた。私はすかさず、ランガー教授の方は、主意主義的に過ぎるのではないかと反論したが、国力と歴史的体験を全く異にするアメリカと日本とでは、東南アジアの民族・社会革命に対する見方が違ってくるのは、むしろ当然だ。日本としてはアメリカとの友好関係を尊重しながら、独自の東南アジア政策を行なえばよいのである。

4 大きな収穫

この点に関連して、一番痛感されたのは、東南アジアは将来どうなるのか、という点に関する明確なヴィジョンが日本に欠けている点であった。はっきりしたヴィジョンがないところに、強力な政策が生まれるはずがない。間違ったヴィジョンにもとづいて「大東亜共栄圏」のようなとんでもない政策を強行するよりは、ヴィジョンも、政策もほとんどないという現状の方がまだましだ。それにしてもV・P・ダット教授や

フラ・ミント教授も強調したように、アジアにおけるただ一つの高度工業国としての日本への期待は、新興国では特に大きい。他面日本は金もうけのことしか考えていないのではないかという非難が高まっていることは、チョムチャイ教授やサニエル教授も指摘した通りだ。

では日本の東南アジア政策を今後どのようにして具体化してゆくべきかという点で、私は三つの報告から一番多くの示唆をえた。一つは、東南アジアの政治文化を精密に分析した上で、日本が寄与すべき点、日本が採用すべき方策を具体的に提案したバジリー教授の論文であり、第二は、東南アジアに対する米中両国の政策を中心にこの地域の国際関係をみごとに分析して、日本の外交政策に理論的基礎を与えた高坂教授の論文であり、そして第三は、東南アジア諸国を経済の面から外向型と内向型との二つのタイプに分類して、これらの国々に対する日本の経済政策を導き出したフ

ラ・ミント教授の論文である。この三つの論文はその理論的水準において、また具体的提案においてすべての参加者を傾聴させた。特にミント教授がタイ、フィリピン、マレーシアの三外向国が、外国との通商と外国からの援助とに開放的な政策をとった結果、インドネシア、ビルマなど閉鎖的態度をとっている国々との間に経済成長という点で大きく水をあけたことを数字で示されたのはもっとも印象的だった。

私たちのシンポジウムに対する日本側の寄与として、私は最後に中国の政策を解明する鍵を提供した衛藤教授の報告、1975年の中国経済を予測した石川教授の報告およびタイの農地問題を分析して、土地改革の必要性を——恐らく世界ではじめて——明らかにした本岡教授の報告を挙げたい。いずれも長年の研究にもとづく着実な研究発表として、参加者たちに強い感銘を与えたようである。

シンポジウム参加者氏名所属

Prof. Badgley, John H.	Miami University (U.S.A.), Department of Government, Visiting Professor to Kyoto University (1964-65)
Prof. Benda, Harry J.	Yale University, Southeast Asia Studies (U. S. A.)
Prof. Choomchai, Prachoom	Chulalongkorn University, Faculty of Political Science (Thailand)
Prof. Dutt, V. P.	Indian School of International Studies (India)
Prof. Feith, Herbert	Monash University, Faculty of Economics and Politics (Australia)
Prof. Hla Myint	Oxford University, Institute of Commonwealth Studies (U. K.)
Dr. Langer, Paul	The RAND Corporation (U. S. A.)
Dr. Pauker, Guy J.	The RAND Corporation, (U. S. A.)
Prof. Saniel, Josefa M.	University of the Philippines, Institute of Asian Studies (The Philippines)
Prof. Wurfel, David	International Christian University (Tokyo)
Prof. Eto, Shinkichi	Tokyo University, Faculty of Liberal Arts
Prof. Fukuchi, Takao	International Christian University
Prof. Fukushima, Tokujuro	Kyoto University, Faculty of Law
Prof. Inoki, Masamichi	Kyoto University, Faculty of Law
Prof. Ishikawa, Shigeru	Hitotsubashi University, Faculty of Economics
Prof. Iwamura, Shinobu	Kyoto University, Research Institute for Humanistic Studies

	Director of the Center for Southeast Asian Studies
Prof. Kamakura, Noboru	Kyoto University, Faculty of Economics
Prof. Kamiya, Fuji	Osaka City University, Faculty of Law
Prof. Kosaka, Masataka	Kyoto University, Faculty of Law
Prof. Kozai, Shigeru	Kyoto University, Faculty of Law
Prof. Motooka, Takeshi	Kyoto University, Center for Southeast Asian Studies

シンポジウムに提出された報告

Necessity and Choice in Japan's Relations with Southeast Asia	Prof. Badgley, John H.
Burma's Zealop Wungyis: Maoists or St. Simonists	Prof. Badgley, John H.
Modern Indonesia under the Historian's Looking Glass	Prof. Benda, Harry J.
China and South-East Asia	Prof. Dutt, V. P.
Indonesia's Political Future: Some Implication of A Current Academic Disagreement	Prof. Feith, Herbert
The Inward and the Outward Looking Countries of Southeast Asia and the Economic Future of the Region	Prof. Hla Myint
Indonesia in 1964: Toward a "People's Democracy"?	Prof. Pauker, Guy J.
Japan's Future in the Philippines	Prof. Saniel, Josefa M.
Some Operational Codes of the Peking's External Activities	Prof. Eto, Shinkichi
Political Tension versus Economic Growth — the Case of Indonesia —	Prof. Fukuchi, Takao
Japan and Southeast Asia: A Policy Proposal	Prof. Inoki, Masamichi
Impacts of China's Economic Development upon the Countries in Southeast Asia	Prof. Ishikawa, Shigeru
Short-Period Fluctuations in Export Proceeds in Southeast Asian Countries	Prof. Kamakura, Noboru
Southeast Asia and the Powers: Characteristics of International Relations in Southeast Asia	Prof. Kosaka, Masataka
Problems of Land Reform in Thailand with reference to the Japanese Experience	Prof. Motooka, Takeshi

追 記

このシンポジウムに提出された諸論文は、Prof. John Badgley と私とが編集して、1966年3月までに、東南アジア研究センターから英文で刊行される予定である。なお外国人学者の論文中若干のものは、雑誌「中央公論」に日本語で、掲載されることになり、すでに、上に掲げた論文のなかから Prof. Hla Myint のものと、Prof. Saniel のものとは、同誌9月号および10月号に発表された。ひきつづき、Prof. Benda, Prof. Feith, Prof. Dutt のものも同誌の12月号以降に順次掲載される予定になっている。この点で、「中央公論」の笹原編集長と粕谷次長とに深く感謝する次第である。